



禁じられた愛

違法化された同性愛者の

死刑執行【体験版】

# 目次

同性愛禁止法 .....	3
最期の夜 .....	6
身体を重ね .....	10
レモン味の雫を求めて .....	15
愛の証をいっぱい浴び .....	19
愛を貫く覚悟を決め .....	24

## 同性愛禁止法

この国では明日から男同士、女同士での性行為が禁じられます。

同性愛禁止法。

少子化対策のためと政府は説明していますが、実際は同性愛を忌み嫌う政治家たちの主張が認められてできた法律です。

同性愛者や心ある人は反対しましたが、ついにこの法律が成立しました。しかも、違反者に科される刑は死刑です。

多くの同性愛者がそれを許される国へ逃げ出しました。

しかし、外国へ引っ越すには多額の費

用がかかります。

その国の言葉が分からないと生活できません。

同性愛者にはすでに警察が尾行しています。

隠れて愛し合うことは難しいです。

そのため、涙を忍んで別れるカップルも大勢います。

うめだまいこ まつかわ ゆ み  
梅田舞子と松川裕美も決断を迫られた  
カップルです。

二人ともお金は無く、英語もできません。

同性愛禁止法の施行が明日に迫る夜に、舞子のマンションに裕美が訪れま

す。

## 最期の夜

ピンポーン

インターホンの音が聞こえます。  
モニターに映るのは裕美の姿です。

私はドアを開け、  
「いらっしゃい」  
肩身が狭い私たちなので、小声で迎えます。

裕美は暗い表情を浮かべたまま私のマンションに入ります。  
私もいつものように素直に喜ぶことはできません。  
二人の関係が許されるのは今日が最後なのです。

「外はどうだった？」

裕美に尋ねます。

「後をつける人がいた。たぶん、警察の人」

「そっか」

私たちの関係は警察に知られています。

もし深夜12時を過ぎて一緒にいれば、きっと私たちは逮捕されるでしょう。

同性愛禁止法の施行日が明日に迫り、私たちの関係をどうするか、まだ決めていません。

外国に逃げることはできません。

別れなければ逮捕され死刑。

でも、裕美と別れることなんて考えられません。

冷蔵庫からカクテル缶を取りテーブルに置くと

「さっき<sup>きょうこ</sup>京子さんから電話があったの」

裕美がつぶやきます。

<sup>きょうこ</sup>京子と<sup>えみ</sup>恵美も私たちと同じ女同士のカップル。

時々ダブルデートを楽しむ仲です。

「京子さんから？」

「うん、恵美さんと別れるって。今日がお別れのデートだって」



「そう・・・」

この国で生きていくためにはそうする  
しかありません。

「最後にいっぱいキスするって」

裕美はカクテルをぐいっと飲み、

「舞子・・・ 私たちも・・・」

裕美とキスできるのは今夜が最後。

カクテルで濡れた唇に、いつもより激  
しく

ちゅうう

## 身体を重ね

柔らかい裕美の唇の感触にうっとりします。

出会って、愛し合って3年。

何度も吸って、吸われて、求め合った唇が愛おしくて。

何度もちゅうちゅうしちゃいます。

「舞子っ んんっ ちゅうう」

裕美も激しく求めてくれます。

舌を伸ばすと裕美はそっと唇を開き、互いに絡みつきます。

クチュクチュ

裕美の舌は甘酸っぱいです、

さっき飲んだばかりのスクリュードライバーのオレンジの味。

ぎゅっと裕美を抱きしめます。

裕美も私を力いっぱい抱きしめてくれます。

裕美の首筋にそっと右手を伸ばし、スリスリと。

肩から背中へ、お尻へ撫でていきます。

愛する人とつながりたいのは男女の恋愛も女同士の恋愛も同じ。

裕美の素肌を求めソファに押し倒し、服を掴んで脱がせます。

私が服を掴むと裕美は手を上げて脱が

せやすくしてくれます。

ぷるんっと揺れる乳房をブラが支えています。

そのブラのホックも外してしまい、綺麗なピンク色の乳首に

ちゅう　ちゅうう

「あああ　んっ」

裕美の敏感なところにキスしちゃいます。

「今日はいっぱいキスするよ」

「うん！　いっぱい、いっぱいキスして」

首筋にちゅう

ほっぺにちゅう

おでこにちゅう

「ああ・・・」

おへそにちゅう

スカートを脱がせ、太ももにちゅう

太ももの内側をぺろぺろ舐めながら、  
大事なところを隠すパンティにちゅう

「あうう！」

「裕美のここ、もう濡れてる」

「だってえ」

パンティ越しに何度もちゅうちゅうキスする私。

布地の先に、だんだん硬くなってくる  
ものを感じます。

「いいっ んんっ そこだめええ！」

指を当てるとじゅわっとお汁が染み出てきます。

## レモン味の雫を求めて

パンティを降ろすとトロツッと糸を引きます。

「裕美ってホント濡れやすいんだね」

「はあはあ 舞子にしてみたらうからだよお」

裕美の脚を広げ、こぼれそうなお汁を  
ぺろっ

ぺろぺろ じゅるるる

「ひゃんっあうう！！」

裕美のここはちょっと酸っぱいレモン味。

癖になっちゃう味です。

ビクビク反応する裕美が可愛い。

何度も責めたくになります。

舌を割れ目に這わせ

「んんっああ　あうう」

乳首よりさらに敏感な突起に

ぺろっ　ぺろぺろ　ちゅうう

「だめええ　んっいやっ　あうう

う！」

またトロリと溢れてくるレモンジュース

スをじゅるるる

「ああんんっ　はあはあ・・・」

「美味しいわ　裕美の味」



割れ目を舐め回し、もっとレモンジュースを求め舌を奥へ。

「あううう」

締め付ける裕美の中をかき分けるように奥へ、奥へ。

裕美の中は熱くてじゅくじゅくで、締め付けられる感触にゾクゾクします。顔を股間にグリグリ押しつけ、

「んんっだめえ」

とっても敏感なところに鼻が当たり、裕美の体はピクピク震えます。こうするとお汁がいっぱい出るんです。

奥まで舌でかき回しながらあふれ出るお汁をじゅるじゅる味わう私。これを味わえるのは今夜が最後。

「ひゃんっ んんっひゃんっんっ」  
裕美の可愛い声を聞けるのも今日が最後。  
そう思うと、いつもより激しく求めて  
しまいます。

## 愛の証をいっぱい浴び

「裕美！　美味しいわ」  
ちゅくちゅくじゅるるる  
「うううあうう」

喘ぎ声をこらえられない裕美をいつも  
以上に激しく求める私。  
男の子のモノの代わりに舌をピンと伸  
ばし、内壁を舐め回します。  
奥まで突きます。

ぐちゅぐちゅ　ちゅうちゅうちゅ

裕美の気持ちいい顔を見たくて、気持ち  
いい声を聞きたくて、疲れてしびれ  
る舌でじゅくじゅく責め続け、

「はあうううう」  
ビクビク痙攣する裕美

ビュクッ！　ビュクビュク・・・

顔にびっしょりと裕美のお汁が降り注ぎます。

「ああ　はあはあ・・・」  
「裕美のお汁、もっと・・・」

ジュルジュル  
「ひやううああ」

ジュルル　ジュルルルッ  
「もうだめっ　ああっあ！」

トロリとこぼれる愛液を舐めとり、裕

美の顔を見上げます。

裕美は恥ずかしそうに目をそらし、

「はあはあ 激しすぎ」

「だって・・・ 最後だと思うと」

「うん」

ぐったりと裕美の身体にこの身を重ね、

「舞子・・・ すごく感じちゃった」

「裕美の感じる顔見たかったから」

息を荒くするする裕美の唇に、

ちゅう

柔らかくてねっとりした感触が心地い

いです。

このままずっと一緒にいたい。

壁にかかる時計を見ると時刻は夜 1 1 時 4 0 分。

私たちの愛が許される時間は残りわずかになりました。

「ねえ、裕美。脱がせて」  
残されたわずかな時間、せめて肌と肌で触れあいたくて。

裕美も慣れた手つきで私の服を脱がせブラのホックを外し、私の乳首に

ちゅっ

「ああんっ」

乳首をちゅぱちゅぱ吸われながら裕美  
の手はスカートを下ろします。  
そして股間をスリスリ

「んっ んんっ」

「舞子も濡れちゃってる」

「裕美の声聞いて興奮したの」

パンティを脱がせられると茂みはじゅ  
っくり濡れていました。

## 愛を貫く覚悟を決め

裸で抱き合い、二人は時計を見つめます。

「舞子、これでお別れなんて嫌」

「わたしも、裕美」

「死ぬまでずっと舞子と一緒にがいい」

「裕美・・・」

私も、少しでも裕美と一緒にいたい。  
愛し合いたい。

でも、私たちは監視されています。

12時を過ぎて愛し合うことが見つければ私も裕美も捕まって死刑。

きっと、このマンションは監視され、  
声を聞かれているでしょう。



裕美と一緒に死ねるならそれでもいい。

でも、そんな勝手なこと言えるわけない。

裕美が死ぬなんて嫌。

それなのに、裕美の手は私の茂みに伸びて、

「あうう んっ」

いつもなら素直に受け入れますが

「はあはあ 裕美・・・ もうすぐ12時よ」

「ずっとつながっていたいよ、舞子とずっと」

「だけど・・・」

指は私の中でチュクチュ音をたて

「あう うんう んっんんっ」

「舞子、ごめん わたし我慢できない」

裕美は私の足首を掴んで広げます。

「あああ」

股間に顔を近づけ

ちゅう ちゅるるる

「ひゃんんっ んう」

我慢できないのは私も同じ。

裕美の舌の感触に神経を集中させ、じんじん電気が流れるようです。

もっと、もっと舐めて！

私のお汁いっぱい吸って！

想いが通じたのでしょうか、裕美の舌はさらに激しく私の中を

クチュクチュ　チュパ°チュパ°チュウ

トロリとお汁がこぼれるのが自分でも分かります。

ジュルルッ

「あうう！　んっ　んんっ　ああ  
あ・・・」

意識が一瞬、飛びかけました。  
快感が身体の奥からあふれ出るようです。

「捕まったら私に無理やり襲われたっ

て言って」

「はあはあ 裕美・・・」

「私も舞子を無理やり襲ったって言うから。そうすれば死刑になるのは私だけだから」

そう言いながら裕美はソファのクッションからカバーをとり、私の手を縛ります。

「これで舞子はレイプの被害者になるわ」

「いいえ、裕美」

緩く縛っただけのカバーはすぐに解け、裕美をぎゅっと抱きしめ、

「私も裕美とつながりたい。裕美と愛し合いたい」

裕美を押し倒し、脚を絡ませ股間と股間をクチクチ

「んんっ」

「ひゃうんっ」

「舞子だめ。舞子も死刑になっちゃう」

「いいの。裕美がいない世界で生きる意味はないから」

思いっきり裕美を求める私。  
それは裕美も同じで、二人は股間を押しつけ合い唇を求め合います。

「んんっ 舞子！ 舞子っ！」

「裕美！ 大好き！ 裕美っ！」

私たちは欲望のままに快感と、そして  
愛を求め合います。

ぴちゅぴちゅといやらしい水音が響き  
ます。

身体の奥からじんじん気持ちよさが溢  
れてきます。

クチュクチュ　チュパ°チュパ°チュウウ

二人の舌は絡み合い、互いの乳房はむ  
にゅむにゅ密着し

【以上、体験版】